

新型コロナ

慶応大大学院教授

蟹江 憲史

かにえのりちか 国際関係論、地球システムガバナンス。編書に「持続可能な開発目標とは何か」51歳。



論壇

世の中が変わる瞬間を「ゲーム・チェンジ」と表現することがある。

これは本来、ビジネスの新たな枠組みやルールが始まることを指す言葉だ。しかし、ゲーム・チェンジが、その根底にある社会や環境の変化に突き動かされるとすれば、より広範で大きな変革がさまざまな場所で起こる可能性を秘めているはずだ。今起きているのは、そのような地殻変動ではないか。

コロナ禍で、「密」を避け、人との接触を最小限に抑えることに端を発して、構造変化が起きる可能性が指摘

されてきた。例えばテレワークやオンライン会議が普及すれば、大都市の中心部にオフィスを構える必要がなくなる、というのである。経営者は郊外や地方に居を構え、必要に応じて会合を招集し、都市を訪れる。従業員も、満員電車で通勤する必要はなくなり、要していた時間を家族とのだんらんや趣味に充てられる。会社はオフィス維持に支払っていた経費を別のことに活用できる。

そして、これらが早くも現実になってきた。知り合いの経営者には、地方に拠点を移す者も現れた。先日

ことが合理的だとわかっていても、なかなか舵を切れなかった。結果としてコロナ禍が背中を押し、一気に変化が進み始めている。

登壇したシンポジウムでも、ベンチャー企業が4月時点で都内のオフィスを手放し、その経費で新たな雇用を生み出したという話を聞いた。誰もいないオフィスに経費を払い続ける無駄をいち早く省くベンチャー企業のフットワークの軽さもあるが、大企業も拠点を地方に移すところが出てきている。これまで、こうした

ていたことが、実は今の技術で、どこでもできるようになっている。さらに場所からの解放は、時間からの解放にも連なる。「その時」でなければいけないと思っていたことは、実は一定の範囲であればいつ仕事をしても良いことにも気がかされる。場所と時間からの解放は、多くの可能性を広げている。

起こった変化が、その後の世界でも継続したり、その波及効果によって他の変化を誘因したりするものである。先に挙げた都市構造の変化はこの例だといつてよい。

確かにコロナ禍は、貧困の状況を悪化させたり、グローバルな食糧供給網を分断したりして、SDGsを後退させる負の遺産も残したが、達成の端緒も与えているのだ。この変化をより大きな変革につなげ、災害や災害にもびくともしない力強い社会構築へとつなげることが重要だ。変化の先を読むことで、今後どこ

災禍が秘める変革の可能性

そしてコロナ後を考える時、そこには二つの事象を見通す必要があるだろう。一つは、コロナ以前の状態に戻ると考えられるものであり、初等教育の対面授業などはその例だ。

新たな機会をもたらした、と考えることもできる。その一つが、先に触れた「場所からの解放」である。特定の場所でなければできないと思っ

のある仕事を得る」という目標8やジェンダー平等を目指す目標5に貢献。通勤にかかっていたエネルギー消費の削減は、エネルギー利用効率の向上をうたう目標7や、気候変動対策を実施する目標13の達成につながる。郊外や地方への人の流れは、地方創生を通じた持続可能なまちづくりを実現する目標11が描く姿だ。

緊急経済対策の先にあると思っただけで、既に見え始めている。長期的な視点の有無が勝負の分かれ目だという気がしてならない。

緊急経済対策の先にあると思っただけで、既に見え始めている。長期的な視点の有無が勝負の分かれ目だという気がしてならない。